

## 令和の時代を迎えて

人間福祉学部長 大 和 三 重

2019年5月1日から元号が令和に変わった。昭和、平成と生きてきた者にとってはいよいよ年齢を重ねた思いを感じざるを得ない。令和元年は人間福祉学部開設から12年目にあたる。開設時から共に人間福祉学部を支えて下さった井出浩先生と陳礼美先生が今年度をもって去られる年でもある。学部の始まりから様々な出来事を共有してきた同志が去っていくのを見送るのは本当に寂しい。それは学生に対しても同じである。緊張して迎えた入学式から4年という月日の間に大きく成長し巣立っていく学生たちを見送る卒業式の夜は寂寥感にさいなまれる夜でもある。

我々は日々出会いと別れを繰り返しながら生きている。別れの寂しさは耐え難いが、新しい出会いが待っていることも確かである。教員は大学という同じ場所で過ごしているが、学生たちは4年経てば去っていく。それぞれの4年間を胸に新たな道に進んでいく。彼らの悲喜交々の4年間に携わった教員にとって別れは本当に寂しく物悲しい。しかし一方で、また新しい学生たちがやって来る。我々はまるで定点観測をしているのごとく、同じところに立っているが、入学してくる学生たちは関西学院大学という学び舎を通過していく存在である。その4年間に学生たちが大学で学ぶ楽しさを味わい、生涯の宝となるような出会いや経験をすることができれば何よりである。我々教員の役目はそのために優れた研究や教育を行い、彼らの学習環境を整えることである。

先日、「日本のパスポートは最強？」という日本経済新聞の記事(2019/12/13)に目が留まった。「最強」の理由は英国のコンサルタント会社が世界199か国・地域に調査した中でビザ(査証)なしで訪れることのできる国・地域の数ランキングしたところ日本は190で2018年から2年連続1位に輝いたことによる。ビザを免除するのは、そうすることで渡航手続きを簡略化し観光客を増やして人の交流を促すためである。一方で行き来がしやすくなれば犯罪者なども入りやすくなり治安が悪くなる危険性も増す。つまり、ビザが免除される日本は相手国から高い信用を得ている証と捉えることができる。確かにこれまで仕事で出張するときにビザを必要とすることはほとんどなく、随分とその恩恵に浴していたのだと気づく。だが、このように日本人は世界で最も多くの国をビザなしで訪れることができるのに、他の先進国に比べて肝心のパスポートの所持率が低いらしい。本学はSuper Global Universityに採択され海外留学を推進しているが、OECDの統計では日本人の海外留学者数は減少しているという。せっかく最強のパスポートを持つことができる機会に恵まれながら日本人は海外に目を向けることをせず内向きになっているのではないかとその記事は結んでいた。しかし幸いなことに人間福祉学部では様々な海外プログラムに参加する学生が増えつつある。先日もある学生が海外での感動体験を熱く語ってくれた。そのキラキラと輝く眼は今後の彼の人生に少なからず影響を与えるだろうと確信した。これからの令和の時代には、人間福祉学部の学生たちに一人でも多くあのキラキラ感を味わってほしいと願っている。